

39. 黒島の地学的自然

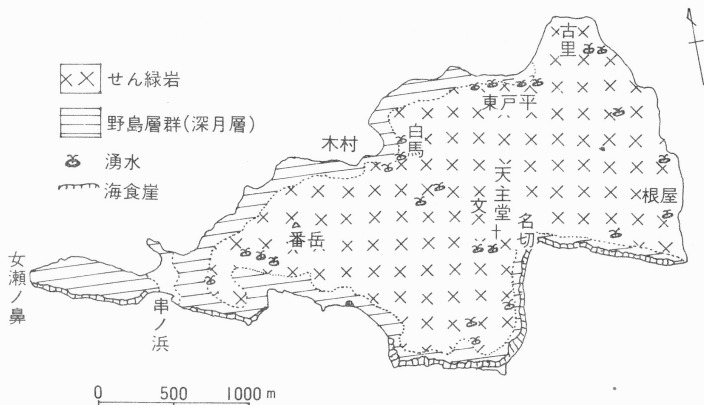
地 域	佐世保市黒島
交 通	佐世保市相浦棧橋より黒島丸運航——1日1往復
地形図	虻ノ浦（1/50,000）、黒島村（1/25,000）

黒島の北岸は子牛大の黒緑がかった黒島ミカゲ石（せん緑岩）の巨れきが無数に横たわり、一種独特の海岸景観を呈する。本村の棧橋につくと、近くに機械化された石工場がある。県北や佐世保市内の有名な記念碑や工芸品は、すべてこの黒島石でつくられ、徳川時代より名声が高い。

黒島の基盤は佐世保層群の上位を占める野島層群（深月層）で、島全体が子牛大、又は小屋大のせん緑岩と、その風化土じょうの赤土に覆われている。西部から中部にかけては、風化作用が著しく、堀割等に典型的な玉ねぎ構造が観察されるが、東部は新鮮である。

北海岸の波静かな女性的な海岸に対して、南海岸は怒濤^{どとう}逆まく、豪壮で男性的な海食崖に一変する。この事は南風の激しさを物語り、海図を見ると北岸よりも南岸の海底が浅く海食台の存在を証明する。とくに島の西端の陸繋島^{けい}は、島の南半分が波食を受け、広い隆起海食台を展開する。黒島全体の地質断面は南岸を船上より見るにしくはなく、さながら壮大な地質断面の模型を見るの感がある。基盤の佐世保層群と、それを被覆するせん緑岩の境界は明瞭で、佐世保層群を縦に貫く岩脈が所々にみられる。この岩脈の中には潮岬の橋坑岩のように、海食台上に堤防状に連なるものもある。

この海食崖の佐世保層群とせん緑岩の境界は帯水層^{みずしま}となっていて、地下水が水滴となって流下している。黒島は昔より水島と称せられ、水が豊富で、居住の歴史は遠く鎌倉時代にさかのぼる。湧水地の分



黒島地質図

布が海岸付近に多い事は、帯水層が前記境界線付近である事からうなづける。北岸の本村はその名のごとく本村で、天正年間に島の豪族「西常陸」が、豊富な湧水を利用して、上屋敷を構築したが、今も庭先は水音を立てている。

せん緑岩は完全に佐世保層を被覆しているが、岩床状に貫入したものと考えられる。しかし本岩の上位には、まったく堆積層を欠いているため、その証拠は今のところみだされていない。この黒島ミカゲ石は暗緑灰色を呈し、新鮮なものは磨いた面が美しい。主成分鉱物としては斜長石、輝石、角せん石等が認められる。

平戸藩における黒島石開発の歴史は古く、遠く徳川時代の初期、松浦鎮信公に始まる。北部の島々より地質をたどって黒島に到達している。当時は石工技術が幼稚なため、あまり堅くてもあまし、半分加工して100数年海岸に放置してあったらしい。徳川時代の後期、松浦静山公の頃、良工を得て切出しに成功し、多年の念願を達成している。石燈籠等を、江戸表まで船で積出した歴史もある。

その他天文学では、文化10年2月8日、伊能忠敬が地形を測量し、その夜星座を観測している。また対岸津吉では木星観測の歴史がある。(吉富 一)